

令和4年度 第9回江別市かわまちづくり勉強会（第二部） 会議録（要点筆記）

日時	: 令和4年6月30日（木） 18:00～20:30
場所	: 江別市コミュニティセンター 1F多目的ホール
一般会場参加者	: 13名（かわまちづくり協議会委員3名 一般参加10名）
一般オンライン参加者	: 8名（かわまちづくり協議会委員1名 一般参加7名）
事務局	: 経済部商工労働課長、商工労働課主査（2名）、建設部都市建設課長、建設部都市建設課道路整備係長、建設部土木事務所治水課長、経済部観光振興課長 他2名
その他	: 北海道開発局 札幌開発建設部 江別河川事務所（4名）

**会議概要**

1. 開会

2. 議事

- (1) これまでの勉強会の流れ（説明：事務局 半田主査）
- (2) 支援制度への申請までの流れ（説明：事務局 半田主査）
- (3) 第8回勉強会の議事概要・主な意見（説明：事務局 半田主査）
- (4) これまでの意見を踏まえた取組イメージ（説明：事務局 半田主査）
- (5) かわまちづくり計画書の概要について（説明：事務局 半田主査）
- (6) ロードマップ(案)について（説明：事務局 半田主査）
- (7) かわまちづくりに関連した取組み（説明：江別河川事務所 濱口課長、ミズベリング 江別 林代表、北海道情報大学 藤本准教授）

ミズベリング江別 林代表に司会進行を委任

(8) グループワーク

参加者を A～C 及びオンラインの4グループに分け、下記についてグループワークを実施

対岸側河川空間の利活用について（どんなことができそう？実現させるためには？）

- ①石狩川・千歳川合流点付近の利活用
- ②防災ステーション付近の河川敷の利活用
- ③千歳川の水辺利用・アクティビティ
- ④まち側（条丁目地区）との連携

#### 【グループワークの発表：Aグループ】

今後、どういう使い方をするかといったときに、ちょっと雨が降ったら水に浸かったり、流木も流れてきたりして危ないので、建物を建てたり大きな整備をすると勿体ないことになるのではないかという話があった。今のままを活かして、あまり大きな手を加えないというところから意見がスタートした。

大川通地区の先端の方に行くと非日常感がすごいので、何かあの体験を聖域にできないか。自分の家のすぐ近くで非日常的な体験ができるような新しい暮らし方を皆で体験したり提案したり、発信できる場所にしたらいいのではないかという話が出た。地元の良さに気づきそれを子どもにも伝える、そういう学びの空間になっても面白いのではないかという話が出た。

そのために、まずは今年度、すぐに撤去できる移動式のものでイベント的にチャレンジしてみるのもいいのではないかという意見があった。キーワードは「仮設」で、初期投資を抑えて健全なビジネスモデルを作ることにも繋がっていく。あまり最初にお金を掛けないで、そんなにぼろ儲けもしないけど、資金的にはちゃんと回っているというような仕組みができればいい。そうしたら、全国のいろんなところでも、地元の使われていないところを使った活動に繋がっていくかもしれない。そのためには、誰と一緒にになったらできそうかといったところで、やる時には江別漁業会に事前に情報を共有した上でやるのが絶対に必要だと思う。

ちょっと盛り上がったのは工場夜景で、王子製紙がすごく近くにあるので、話し合いを持ちながら一緒にやっていくこともあるのかなと思う。

そういったチームを作っていくためにも、まずはイベント的にやってみて、気持ちを盛り上げていく。それを元に、このエリアを管理する組織を立ち上げていかなければならない。イベントで終わってしまうと、イベントのためのイベントになってしまうので、今あるかわまち勉強会や協議会を見据えながらしっかり考えていく。資金が循環しながら、何かしら売り上げがあってそれを使っていかないと継続しないので、収益を条丁目のまちづくりに還元するだとか、そういったものをマネジメントする組織を立ち上げられるといい。イベント的な実験・チャレンジとして、かわまち、水辺の楽校、かわまちスクール、そういったものでこの良さを皆で知る。本当に、このまちいいねと言ってくれる人が増えていく、そういった機運に繋がっていくといい。

#### 【グループワークの発表：Bグループ】

今日は三人の参加者の中で二人が第一部から参加していたので、現地を見て、この辺りの魅力はどういうところなのかというところから話をスタートした。

昨日からの雨があったが驚くことにすごく水捌けがいいし、このエリアよりもっと狭い北村や月形町でも人気のスポットになっているので、すごく可能性は高いという話が出た。ただ、市街地側からの直線距離に対して、どうしてもアクセ

スがあまり良くないし、国道 12 号のバイパスがそれなりのスピードで交通量も多いので、ガードレールを敷設してもらうとか、国道 12 号から下りられるようなアクセス階段なり、ループ橋みたいなものができる、ガラッと変わるのではないかという話になった。

意見が割れたのは川や水の使い方で、男性目線では水に落ちて濡れてもいい、水と戯れていいという考えだが、女性目線では怖い、危険、水の事故というところが先に出るようだ。水に近い環境でも、必ずしも水に接しない遊び方でもいいかもしれない。いきなり深くなって確かに危険があるので、見えないようにネットを張るような工夫はできないだろうか。

市街地側と対岸側の直線距離のわりに、迂回してアクセスしないと行かないのが使い勝手の悪さに繋がっているという意見なので、吊り橋的なものが本当に必要だということを改めて話し合いの中で感じた。川の中に透明チューブで水中トンネルを作って繋ぐというような話で盛り上がった。

すごくいい場所だが、まだまだ使い勝手の悪さもあるので、まずは地域の人たちがどんどん使えるような環境整備をして、いきなり民間的にお金を取ってアクティビティをビジネスとしてすぐ目指すわけではないという考え方もある。

#### 【グループワークの発表：C グループ】

大川通を中心にどんなことができるか、やりたいかということ話をした。キャンプはやるとして、電線がないのはいいという話が出た。ある程度騒音が出ても迷惑になる感じでもない、キャンプで騒いでもいいし、音楽フェスみたいなことをやってもいいのではないかという話が出た。水フェスのようにシャボン玉をやったり水鉄砲をひたすら掛け合って遊んだり、水遊びのメッカのようなものもいいのではないかという話が出た。

川は見ているだけじゃなく水に触れられるようにしたいということで、水を引き込んで親水公園を作ったらどうだろうか。それならば、親も安心して子どもを遊ばせられるし、引き込む水を浄化すると安心して触れられるという意見もあった。川で花火を上げて、船の上からその花火を見るのも良いのではないかという意見も出た。

教育的なところで、川を使って子どもと何かをやりたい。遠足コースにしてもらうとか、防災ステーションで歴史や防災を学びつつ、何か体験するような繋がりもあるのではないか。

この辺は自然環境も豊かなので、水鳥とかカニなどを実際に見て触ったり、泊まりでバードウォッチングも楽しいのではないかという話が出た。

少し大掛かりな話だが、島を作ろうという話が出た。プカプカ浮かぶ島の上にワーキングスペースを作るとか、アンカーを打って何かできるような舞台を作ってしまうというのもありではないか。

風が強いのはどうしようもないので、その風を使って、例えばカイトのメッカにする。その凧も自分たちで作ったのを揚げられたりするといい。風で鳴る楽器のイベントをやってみたら面白いのではないか。

対岸に目を向けてみると、サイクリングロードにもなっていけると思うので、その辺のつながりも当然あるんじゃないかという意見があった。

#### 【グループワークの発表：オンライン】

具体的に何をするかで、キャンプという話が出てきたが、近所に魚釣りが趣味の方がいて、安全柵は必要ではないかと言っていた。草むらと思ったら川だったり、川の流れがちょっと速くて過去に事故があったので、景観や安全に配慮する必要があるという意見が出た。

非日常のショーのような感じで、ライブやオペラ、ダンス、演劇など、岸を挟んで船着き場をステージにして何かやる。対岸が観客席で、川を挟んだショーができるといいのではないか。観劇は普段静かにしないといけないが、子どもや少し静かにすることが難しい人にとっては、静かにしなくてもいい観劇ということで、よりいろんな層にとって観劇体験を開くような仕組みにもなるメリットがあるのではないか。

高校生のブラスバンド、ストリートミュージシャンの練習やライブなど、なかなか発表の場が少ない人たちが日常的に使いやすい場所として推していけないかという意見があった。ただ、騒音の問題があるかもしれないので、許可を取るとなると自由度が低く文化が育ちづらいので、このくらいまでなら大丈夫という基準が明確化されると、皆が自由に使えるのではないかという意見もあった。

また、非日常と日常の接続という独特な観点での意見があった。一発一発イベントを打っていくのは大切だが、例えばオペラを観た子どもたちから演劇へのフィードバックがあるといった仕掛けがあると、日常と非日常がだんだん繋がってこの場所に蓄積されていくのではないかというような意見があった。

#### (9) 総括（小篠会長）

活発なグループディスカッションだったと思う。午後に現場を見て体感しながらどうするかを皆で議論するのは新しい試みで、昨年度までのやり方からバージョンアップし、話はより具体的になったと感じている。

条丁目地区、江別の人たちが自分たちのまちの良さをどう確認して、それをどうやって日常で使ったり発信したり、このまちはこんなことがあって良いのだと言えるのかというところに帰着すると思う。それが大川通地区にあるということも今日現場に行った人は少し感じたかもしれない。それを皆さんに伝えていかないといけない。特に、次の世代を担う子どもたちにどう伝えていくのが大事であって、それをやる良い素材が川沿いにあることを理解できた方が多かったのではない

いかと思う。

川が合流して突き出している細長い土地がある地形はなかなかなくて、アイヌの人たちにとっての聖域というような場所を条丁目地区の人たちは身近に持っている。それを持ち続けていくためにはどうすればいいかを考えていくことが大事だと、今日発見できたのではないかと思う。そういう視点でも、かわまちづくりの活動全体を位置付けていくことが大事である。

先程も「イベントのためのイベントではない」というような話があったが、何のためにやるのかという根本のところを絶えず持ち続けたいといけない。それがまだ共通理解にはなっていないと思うので、勉強会を繰り返しながら、皆で共通の価値観を作って、それを守っていくのを目標として進めていけたらいいと思う。今後、何かの形で青写真を作っていかなければいけない運営組織の最大の目標をそこに置くとするならば、良い着地点になるのではないか。

### 3. 閉会

以上